

【質疑録】

キリングroup R&D DAY

2020年10月6日(火) 9:00 - 12:00

第1セッション

「キリングroupのR&D」

・ビール醸造から広がったR&D
・社会課題解決に貢献する技術とキリンの強み

09:15 - 10:05

キリンホールディングス株式会社 取締役常務執行役員

小林 憲明 (プレゼンター / Q&A)

※質疑応答は第1セッションのみとなります。

Q. 部門トップとしての KPI はどのように設定しているのか？また、研究開発の成果はどのように測定しているのか？

(小林) 研究分野によって、時間軸の違いがある。会社の戦略に応じて研究テーマを決めていくが、テーマに対してどのような成果が出ているかを測定して評価する。それぞれの研究ステージによって指標を決めておく。基本的には、どれだけの資源(ヒト・金)をかけて、どのくらいの成果を出したのか、で評価を決める。どのような指標をつくるべきか、試行錯誤している。また、飲料など新商品開発のための研究と、素材開発の研究でも指標が変わってくる。

Q. キリン社の事業ポートフォリオの変化に対して R&D 部門はどのように変化したのか？新たな売上をつくるための R&D の役割は？

(小林) 新たに注力している部分として、ヘルスサイエンス領域を1つの柱として資源を配分している。協和発酵バイオ、さらにもファンケルも加わり、それらの会社との関わりも考慮しながら、それぞれの会社がどのように貢献していくのか度合いを見て資源配分を決めていく。

Q. 具体的に、現在最も優先度が高い KPI は？

(小林) 免疫機能について日本初の機能性表示食品として受理されたプラズマ乳酸菌や、目に効果があるKW 乳酸菌など、乳酸菌を中心とした免疫領域は最重点の分野。この分野の更なる拡大が重要であり、この可能性をより広げていく。学術的なエビデンスの強さは武器になるため、強化を図っていく。

Q. 一番搾り糖質ゼロについて。新糖質カット製法の優位性は？他社は追従出来る技術なのか？

(小林) 他社がこの技術に対して、全く追従できないということはないと思う。但し、糖質0を実現するには原料などの非常に細かいコントロールが必要。当社の優位性は、その細かなコントロールの技術を持っていること。また、ただ糖質0にするのではなく、香味を調整する技術も難しい。さらに、試験場で実現できたとしても、それを工場で実現するのは難しい。これらの点は簡単に追従できないと考えており、優位性と言えるだろう。

Q. ファンケルとの協業について。研究技術を BtoC のビジネス転換していくことに対して、ファンケルが加わったことで、どのくらい R&D 組織として変化があったのか？

(小林) これまでの当社の R&D は (お客様よりも) シーズ発想であり、お客様のことがよく分かっていなかった、とファンケルと提携したことで感じるようになった。ファンケルはお客様が一見気づかないようなところにも、商品開発における配慮を施している。ビール・飲料の商品開発では常にお客様を意識していたが、ヘルスサイエンスの研究は、基礎的な研究をしている部署が担っており、マーケティングの部署も含め、お客様と研究の間を埋めていくことが必要だ。また、ファンケルの研究員は、説明が非常に上手だと感じる。それは、説明する場面が多く、日頃から練習しているということ。我々も見習っていかないといけない。現在ファンケルとは人材交流も始めており、定期的な情報交換を行っている。

以上